

○千葉 よう子* 吉田 清一郎**

(* 仙台白百合短大, ** 宮城学院女子短大)

〔目的〕前報¹⁾では、正確な編み地を作るためのスタートゲージについて、棒針の太さの変化による編み目の大きさとゲージとの検討を行い、その中で棒針の太さによって単位長さ間の編み目数が異なることを指摘した。そこで、本研究では、機能的な編み物の作品を製作する際、ゲージグラフの曲線や斜線の描く部分で棒針の太さを自由に変えることにより、従来 of 増し目・減らし目によらない製図に近づけることが出来るのではないかと考え、基礎的試料を得るための検討を行った。

〔方法〕手編み毛糸は並太毛糸（ウール100%）を用いた。編みゲージの試料は、6号から14号までの棒針を2号差にとり、30目30段の編み地を製作し、その形状や嗜好性を調べた。さらに棒針を2号差ずつ変化させた時、その編み地の形状が従来の方法による増し目・減らし目を行った編み地との比較を試みた。また、棒針を変化させながら手編みの婦人用セーターを試作し、その評価を行った。

〔結果〕並太手編みゲージで30目30段の試料を比較した場合、棒針10号で編んだ編み地のものが良好であった。棒針を2号差に変化させて編み続けても、編み地の形状に違和感はなく、従来の方法による増し目・減らし目と同様の効果を得られることが認められた。婦人用セーターを試作した結果、ゲージグラフに合わせながら部位ごとに棒針の号数を変化させることにより、体型に適合した作品へと仕上がった。また、工芸教育の指導方法から、棒針の太さを使い分けることで製作工程を簡略にする可能性が認められた。